【シリーズ】患者中心の求められる病院・クリニック

「よく噛める入れ歯」は人生を変える

「うまく噛めない」「痛い」「外れやすい」など、入れ歯でさまざまな悩みを抱える人は多い。そんな入れ歯の悩みを解決するにはどうしたらよいか。最新の入れ歯事情とよい歯科医の選び方を日本補綴学会の田中久敏・元理事長と古谷野潔・現理事長に聞く。

日本補綴歯科学会元理事長
田中 久敏

たなか・ひさとし／61年九州歯科大学卒業。04年青山通り歯科タナカを開業。ワシントン大学準教授、岩手医科大学教授を歴任。日本歯科医学会常任理事。岩手医科大学名誉教授。

日本補綴歯科学会理事長
古谷野 潔

こやの・きよし／83年九州大学歯学部卒業。97年より九州大学歯学部教授。03年同大学歯学部付属病院長などを経て現職。日本補綴歯科学会理事長。日本学術会議会員。

入れ歯には口元の若々しさを保つ役割も

田中 入れ歯で悩んでいる方は大変に多いです。現在、歯周病の治療やう蝕の抑制など、40～50代までの歯科治療は成功していると思います。しかし、その後のメンテナンスが悪いため、噛み合せや歯肉が崩壊して、入れ歯の支台がぜい弱になり、入れ歯を作るにしても大変難しくなっています。

古谷野 また、入れ歯は単に噛めればよいというだけでなく、より審美性と機能性に優れた治療が望まれるようになって来ていると思います。最近の入れ歯の中には、そうした工夫が施されたものも登場しています。

田中 入れ歯を患者さんに十分に満足していただけるためには、相当な努力と解剖、生理や噛み合せの高度な知識と技術が要求されます。それに、入れ歯のかわりに、インプラントにすれば万事うまくいくかというとそうでもない。咀しゃく機能とそれが全身に及ぼす影響について熟知した上で、治療を行う必要があります。また、歯の喪失によって着している筋肉の支枝が失われ変形すると、顔貌は大きく変わります。優れた歯科医とは、そうした面をも考慮した入れ歯がつくれる歯科医でなければならないと思います。

古谷野 おっしゃるとおりです。歯を失うということは、その周囲の歯茎や骨までも失われるということです。入れ歯の歯茎の部分を床と言いますが、床がないと口元に張りが出ません。これをリップサポートと言いますが、高齢でインプラントにしたものの口元のシワがとれない場合など、インプラントの上に入れ歯を入れるといったケースもあります。入れ歯は簡単に着脱できますから、メンテナンスも容易ですしね。

よい歯科医を選んで健やかな毎日を

田中 認知症の方を調査すると、咀しゃく機能が低下した方に多いそうです。歯がないことは行動抑制に通じ、それがやがては認知症を引き起こすのではないかと推察されます。全身の健康のためにも、歯のメンテナンスを十分に心がけていただきたいと思います。

古谷野 入れ歯をきちんと使って生活していると、転倒しにくくなるというデータもあります。現在、医療の目標は、自立して活動ができる健康寿命を延ばすことだと言われています。日本補綴学会では、ここ数年、「入れ歯がつくる健康長寿」というテーマで活動してきました。歯は、食べるだけでなく、人と楽しく交わるといった社会性にも関わりがあります。いくつになっても健康で人生を楽しむために、入れ歯治療が大変貢献していることは間違いないと思います。

田中 よい歯科医を選ぶには、日本補綴歯科学会でも、入れ歯に対する造詣が深く身体についての知識も豊富な歯科医を育成しようと専門医制度を設けていますので、一つの目安にはなるでしょう。

古谷野 同じ歯科医でも、入れ歯治療を得意とする歯科医もいれば、例えば歯周病治療が得意な歯科医もいますし、バックグラウンドは様々です。そこをよく見極めることも大事です。よい歯科医を選んで健やかな毎日をお過ごしください。

— 特集企画❶ —